

新刊  
紹介

## 『若きポーランド 手がかり』

関口 時正 (著)

未知谷 2025.4

本書からは、1880～1910年代にかけて、ポーランド文化が転換期を迎え、新しい文化が芽生え、伝統文化に新たな色彩が加わり成熟を深めた、ポーランド文化の爛熟期ともいえる「若きポーランド」と呼ばれる時代における、約30年にわたるポーランド文化の豊かな熟成と膨らみを感じ取ることができる。

この本は、長年にわたりポーランド文学作品の日本への普及に力を尽くされ、その功績により数々の賞や勲章を授けられ、本年3月には文化功労章「グロリア・アルティス」金メダルを受章された関口時正氏により、詳細かつ鮮やかに描き出されている。

「若きポーランド」(Młoda Polska: ムウォダ・ポルスカ)の時代は、ポーランドの芸術家たちがそれまでの文化的伝統や束縛から解放され自由の気運の大きな高まりをみせた時期であり、広く絵画や音楽、演劇、詩作の世界において芸術家たちの自由と解放の精神の高揚する気風が各作品の作風や技法にまで色濃く反映された。ポーランドの文化・芸術に斬新かつ革新的な息吹が漲っていたこの時代には、パリやベルリンなど国外からアールヌーヴォーなど新しい芸術運動の息吹がポーランドにもたらされた。

特筆すべきは、「若きポーランド」と同時代の明治期の日本文化がヨーロッパに与えた強い影響(ジャポニズム)が「若きポーランド」の重要な担い手の一人、スタニスワフ・ヴィスピャンスキの画風にもインスピレーションを与え、1901年にはワルシャワとクラクフでヤシェンスキ蔵日本展が開催され、当時の日本文化がポーランドに新たに生まれつつあった創造活動に独特の息吹を吹き込んだという事実である。

タイトルに『若きポーランド 手がかり』とある通

り、本書には「若きポーランド」時代を紐解くための**手がかり**がいくつも散りばめられている——近現代のポーランド文化の広汎な分野の成熟と爛熟を、音楽、美術、演劇、詩作などに携わる芸術家とその人生、作風を基本軸としつつ、「若きポーランド」の時代と、この時代の形成を担った芸術家たちに影響を与え、時に彼らの心身の拠り所となったさまざまな**ポーランドの土地**(「若きポーランド」誕生の地**クラクフ**、ポーランド屈指の避暑地、保養地であり、その豊かな自然が多くの芸術家の心身の拠り所、想像と創造の源泉となったポーランド南部の山岳地帯(**タトラ山脈**、**ザコパネ**や**ポトハレ**地方)、その他「若きポーランド」時代の担い手である詩人や画家たちの作品のモチーフとなった**国外の土地**(**ウクライナ**や**シベリア**)など、である。

近現代のポーランド文化の成熟・爛熟期である「若きポーランド」を、その時代を担い形作った芸術家たちの横顔や彼らの生み出した作品の群像をタテ軸に、それと同時代のポーランド国内外における歴史的、民族的、文化的側面の描写をヨコ軸にして多面的・多角的に詳述し、このダイナミックに激動する文芸勃興とその華やかな開花を、この時代に爛熟した水彩画やパステル画のように色彩豊かに描写して強く印象に残る一冊である。

(小池敏大、会員、岐阜県高山市)

若きポーランド  
手がかり

関口時正

## 〈新刊紹介〉

## 『クラクフ・ゲッターの薬局』

タデウシュ・パンキェヴィチ (著) 田村 和子 (訳)

大月書店 2024.11

クラクフの薬局は現代における美容室のような癒しの場であったのかもしれない。戦火に包まれた日常において、そこには一種の「フォーマット化された戦争の在り方」が垣間見える。政治が孕む恐怖と民族の再興——それこそがこの本が伝えようとする記録的意義なのではないかと感じた。

『クラクフの薬局』を読むにあたり、多方面からご指導をいただき、改めて映画『シンドラーのリスト』やシベリア抑留についても学んだ。どの作品にも共通しているのは、「記録することの責務」である。

この書の著者もまた、巻頭においてその動機を明確に宣言している。私たちは、忘れ去られつつある事実と向き合う努力を怠ってはならない。

ゲッター内の薬局に描かれるのは、**民族的アイ**



デンティティとレイシズムの構図である。特に注目すべきは、これが現代日本とも共通する部分を持っている点だ。過疎化が進む日本では、地域の文化や習慣が今後ますます重要視されるだろう。ゲットー内でも、ユダヤ人としての誇りや、終戦への希望が描かれている。

薬局に集う裁判官や大学教授、弁護士たちは、ポーランド語からヘブライ語への転換を求められる。言語は民族の象徴であり、また、ユダヤの食文化に対するゲシュタポの統制は民族の存続そのものを脅かすものだった。これは、日本の先住民であるアイヌや、琉球民族が直面した状況とも共鳴する。人は誰しも「還る場所」を必要としている。薬を買うという行為すら、支配下における「魂の取得」に繋がっているように感じられた。

シベリア抑留やアイヌ民族の問題でも、国家運営の論理的枠組みによって、共通の統制手段がとられていたことが本書からも読み取れる。人工知能における言語処理モデルに例えるならば、シベリア抑留、アイヌ民族、現代日本人といった「パラメータ」によって出力される「論理的結果」が、政治的誘導の手段として用いられているとも言える。

しかし、そこに一筋の救いがある。人種や国境を越えた人道的博愛——シンドラー、杉原千畝、樋口季一郎のような存在こそが、民族を救う鍵である。だからこそ、生き延びた者たちは記録する責務を背負っている。この本は、まさにその証言であり、記録である。

巻末に記された詩人イグナツィ・ニコロヴィチの詩はそれを象徴している。

「あなたは言う、  
かつてゲットーにあった、あの『鷲』薬局は  
世界に二つとない稀有な薬局だったと。〈…〉  
細菌よりもずっと野蛮だった敵、〈…〉  
戦わなければなりませんでした  
日々、命を賭けて」

すべては民族と国家の再興を願う戦いだったのだ。それは現代の日本においても通じるテーマである。私たちはこの良著から民族の誇りを学ばなければならない。日本の心を守り抜くために——そう強く感じた。  
(小篠真琴、詩人、会員)

〈新刊紹介〉

『ソラリス Solaris』

スタニスワフ・レム (原作) 森泉 岳土 (著) (2巻)

ハヤカワ・コミックス 2025.1



ソ連時代を代表するSF作家ストルガツキイ兄弟の弟ボリスは、かつてインタビューの中で、読者がリアリズムの小説を読む時と同様に幻想的な作品の世界に自然と入りこむためには、レムが『ソラリス』のミモイドの詳細な描写や説明に多くの紙幅を費やしたように、ディテールへの細心の注意が必要なのだと述べた。

森泉の描くコミックスで読者を圧倒するのは、まさしくそのミモイドを初めとした惑星ソラリスの海に出現する多種多様な形成物の細密かつ大胆な描写である。ミモイドは、周囲に存在するものの形を模倣し、それに擬態した形状を生み出すもので、雲や飛行機も模倣するが、人間には全く反応しない。大変恥ずかしながら、この本で「ミモイドとは実はこんな形状だったのか!」と驚きのあまり目をみはってしまった。ミモイドに続く「対称体」「非対称体」と称される形成物の生成と崩壊の描写も、このコミックス中の白眉であろう。

『ソラリス』は人類とは全く異なる知性とのコンタクトをテーマとしている。ソラリスの海は人間の抑圧された記憶に何らかの形で接触し、10年前に自殺した恋人を主人公の前に出現させる。その目的はわからない。この「残酷な奇跡」に登場人物は翻弄

される。このようなプロットは精神分析やシュールレアリスムの芸術と非常に親和性が高い。自分のことさえもわからないのに、どのようにして人類以外とのコンタクトが可能となるのだろうか。未知は鏡のように自分の姿を写し出す。SF的設定の中で登場人物はきわめて不安定な心理状態に置かれている。

ソラリスの海のみもイド等の描写は、精密でありながら日常性とは異質な造形となっており、シュールレアリスムの絵画を思わせる。これらは絶対的な他者の表象である。それが下巻の129頁以降、主人公の見る悪夢の場面では鮮やかに反転される。自らに伸びてくる触手が、自分の前に目や頬や口を作り出し、無から女性らしき姿が生み出されるのだ。自己から他者が生み出され対面するのである。

しかし、その像も安定はせず、たちまち自分もろとも目前の像も飛び散り、無限の中に拡散し、主人

公はいつそのこと死による終末を望む。夢というシュールリアリズムが好んだ舞台を借用して細かな点描で生み出されたイメージが、ソラリスの海が生み出すミモイド等と重なり合い、鮮烈で見事だ。

レムは人類という生命体の特権視することはなかった。また曖昧な神秘主義に陥らず、サイエンス・フィクションとしての正確性に執着した。このような厳格な認識がもたらす緊張感、小説では執拗なまでの観察や論理となって現れている。海が生み出した4mの子どもの体の動きが不自然だったと過去の探検隊の隊員が説明する場面がある。小説では、言葉と論理を尽くしてその不自然さが正確に

伝えられており、レムの本領が発揮されている。この名場面に、コミックスではわずかに2分で挑んでいる。小説とコミックスの対決とも呼ぶべき瞬間である。

地球の現実を超えるような事物が取り扱われているが、レムは戦争の時代を生きた人物であった。海が生み出した「対称体」が崩壊を前にキノコ雲となり、その残骸が廃墟のような姿をさらすところはコミックスでもとらえられている。

分断と排除と戦火が世界各地で再び深まっている現在、迫真の筆致でレムの世界に挑んだこのコミックスをぜひ手に取っていただきたい。

(宮風耕治、ロシアSF翻訳家、大阪市)



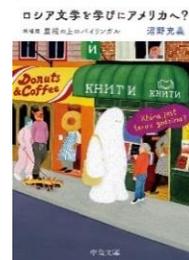
新刊  
紹介

## 『ロシア文学を学びにアメリカへ？』

増補版 屋根の上のバイリンガル』

沼野 充義 (著)

中公文庫 2025.1, 白水社 1996.3, 筑摩書房 1988.4



『屋根の上のバイリンガル』として1988年に初版刊行。今回「はじめに」「ハーバード生活から、三つのエピソード(あとがき)」といくつかの章へ「中公文庫版への付記」を書き下ろした増補版

今、トランプ大統領によって、ハーバード大学に留学する外国人に入国を制限することになり、日本からの留学生も他の大学への変更を余儀なくされています。

著者の沼野充義さんはロシア文学専攻でありながら米国のハーバード大学に留学し、学内だけにとどまらず東欧系移民や亡命作家たちとの交流から得た豊かな体験談を起点に、亡命者・移民・多言語話者の文学や言葉を縦横に考察しています。

移民の言語事情やイディッシュ語など、ときに複雑なテーマを扱っているのに著者のユーモアで、難しい話題が丁寧かつ、読みやすく解き明かされます。21世紀のいまこそ改めて読むべきテーマであり、ロシア(スラヴ)界隈に興味があってもなくても得るものはとても大きいと思います。かつては「バイリンガル」そのもののイメージや社会評価がそれほど肯定的ではなかったということも初めて知りました。

著者は、土地に詳しいわけでもないのにアメリカを車で移動し、憧れの作家に会いに行きます。ヨーロッパでは、フロント・ガラスが割れても修理して東西ベルリンの壁も越えるのです。その行動力と軽やかさに圧倒されます。街の人々の生き生きした姿が活写され、こんな留学生活もあるのかと目から鱗が落ちる思いでした。

スラヴ語など日本ではマイナーな言語についてなど、とても興味深かったです。ハイネの詩は独語

であるからこそ意味をなし、仏語、英語では別物になる。日本ではバイリンガルは良い意味で用いられるが、海外では貧しい移民の象徴で見下された概念という。多言語社会であるアメリカでさまざまな言語を操り人と交流する喜びを、その背後にある歴史や文化を考察しながら軽やかに楽しく描写していて、少なくともかつてのアメリカは多様な文化を受け入れる度量や、大らかさが残っていたのだと思います。

ウクライナが確固とした民族意識を持った人たちであることとか、ヨハネ・パウロ2世がポーランド出身の初の教皇として就任した話とか、現在のウクライナ戦争や、フランシスコ教皇逝去の話とリンクして、現代とつながりました。

えっ、こんな人たちとも交流があったの？ という方も出てきます。有名な人では日本文学専攻のロバート・キャンベル。ハーバード大学の同窓で、東大で国文学を教え、国文学研究資料館の館長を務めました。ハーバード大学が果たしてきた役割を失ってはならないと思います。

トランプ政権の独断的な政治で、自由であるべき学術研究の世界は、ハーバード大学を筆頭としてどうなるのだろう。あとがきに引かれていた旧知の亡命ロシア人のことば「これから四年の間に根絶やしにされてしまうほど、アメリカの知的制度はやわじゃないさ」に希望を持ちたい。(樋口みな子、会員)

(『銀河通信』246: 2025.7\* より転載)

『ロシア文学を学びにアメリカへ?』は、その野心溢れるユニークなタイトルに心惹かれるものがある。“ロシア文学を学びに行くのなら、本家本元のロシアへ”というのが王道なのだろうが、筆者はその選択はしなかった。というより、筆者にはその選択肢は無かったのだ。

時は、1980年代前半。東西冷戦による激しいイデオロギー対立が続く中、当時のソビエト連邦に日本から渡り、ロシア語やロシア文学の研究のために正規留学する事も困難であり、ましてや、筆者の関心の深い反体制作家やソ連からの亡命作家(ソルジェニーツィンやナボコフ、プロツキー)の作品はソ連国内では発禁処分の対象となり、ソ連に留学しロシア文学を研究する門戸は閉ざされかけてしまう…そんな中、筆者の中にひらめいたのが「ロシア文学を学びに、アメリカへ」留学するという道だった。

アメリカに留学すべく、フルブライト奨学金の選考面接を受けた筆者…「ロシア東欧文学を中心としながら、亡命文学やアメリカや日本の文学も視野に入れる」という研究計画を発表し、これに関心を寄せた評論家の江藤淳氏との出逢いに運を加勢され、フルブライト奨学金を得、ハーバード大学のスラブ語スラブ文学科博士課程への留学の道が拓かれた。

太平洋を渡り筆者が最初に踏んだ地は、アメリカ大陸の東端・ニューヨークのマンハッタンであった。「人類のつぼ」「サラダ・ボール」と形容され、世界各地からの種々多様なバックグラウンドを持つ人種や民族の人々を受け入れ続けるニューヨークという都市を筆者自身は「人種の Patchwork」(パッチワーク=つぎはぎ細工)と形容する。

マンハッタンからブルックリンに定住の地を移して根を下ろし始め、多種多様な人種の人々、言語、文化が行き交う中で、ブルックリンの街の一角に**ブライトン・ビーチ**というロシア系ユダヤ人の住むエリアを見つける。ロシア語を学んでいた筆者は、この

エリアに住む人々の話すクロアチア語を聴き、同じスラブ言語の単語の響きに親しみを覚え、次第に、このエリアに住むユーゴスラヴィアにルーツがある人々と英語を使いながら、彼らのコミュニティの中に入ってゆく。

さらに、筆者の探求は、これだけにとどまらない。この地に住むロシア系ユダヤ人の人々の話す共通言語の**イディッシュ語**を学び、そこから見えてくるイディッシュ語の世界の中に、このアメリカの地に息づくユダヤの人々の作り上げる文化の足跡や、ロシア語や英語との接触の中で、イディッシュ語がどのようなアイデンティティを確立していったのかをたどってゆく…。

アメリカに留学した筆者は、言語の世界という**内的世界の探求**にとどまらず、アメリカ大陸の各地に出掛けてゆく**外的世界の探求**にも行動領域を広げてゆく。旅先のインディアナ州に**ポーランド**を発見する。**ワルシャワ**と名付けられた、その小さな田舎町は、ポーランドからの移民が移り住んだという背景から、アメリカに存在しながら、ポーランドの由来を持つに至った由縁を知るに至る。

探険・探求するとは、自らの足で外に出掛け、生きた実態に触れるという**外的世界の探求**であるとともに、**言語**のように、その地に息づく実態を探ってゆく**内的世界の探求**でもあるのだと深く感じさせてくれる一冊である。そして、それらの内的・外的探求を通して**自分とは一体どんな存在であるか**を確かめるに至るのだと教えてくれる一冊である。

(小池敏大、会員、岐阜県高山市)

遠く遡る一九八八年の筑摩書房から『屋根の上のバイリンガル』初刊行の折、私事ながら、湘南から小樽の地に移住した(三千枚のレコードと一万冊余の蔵書と共に。思えば、この一万冊余の中に沼野充義著作が既に何冊か潜んでいる。長い沼野充義フリークと言って憚らない)。

まさに恍惚と不安の昂揚期の只中だったので、新天地に身を置いての心身の心躍り、躍動! という共通項が新鮮で、「屋根の上のバイリンガル」というユーモラスな表題からも、沼野充義が屈託なく、言語から言語に風のように亘るヴァイオリンを、地球の屋根に座ってジョゼフ・スタインの演出なしに、のびやかに弾きつづける様が、本からありあり立ち昇って、新しい地で新しい生を探っていた私をどれほど優しく鼓舞したか知れない。

次の白水社 U ブック版も当然購めているので、中公文庫版はまず増補の「ハーバード生活から、

三つのエピソード」の頁を繰った。ヤコブソンが「君に教授が務まるか?」とナボコフを強硬に排斥したという逸話他が取りあげられている。「ユー・アー・ラッキー!」「人生で一番美味しかった煙草」の二作も卓抜のエッセイで相も変わらぬ艶やかさだ。

二〇二五年のあとがきの筆致の流麗は、一九八八年の筑摩版の初々しくも梅檀(センダン)既に双葉より芳しかった本文の飄逸精緻を、その後の三十七年の歳月がさらに磨きあげて、読者の胸に優しい取捨馴致をもたらすものだ。その文章の精度の豊潤。たとえばナボコフを追い落としたヤコブソンにしても、

エッセイの最後に、狷介な学者として糾弾するのではなく「ぼくは内心自分のことをヤコブソンの孫弟子だと、ちょっと誇らしく思うことにしている」と穏やかに締め括っている。その文章作法の優雅。沼野充義の書くものは奔放闊達でありながら万遍なくその気配りが潤澤に行届いていて温かい。それは半世紀変わらない沼野文学の揺るがないセオリーだ。

さてこのたびの増補版の三篇への手放しの賞賛はさておいて、一九八八年、九六年の刊行時にあれほどバズった本文本篇の魅惑的エッセイに触れよう。この『ロシア文学を学びにアメリカへ?』はこれまで私達が手に取って眼にしている数多の作家達の身辺留学記とは、その趣きを全く異(こと)にしている。まさに「言葉」をその中軸に据えて一步も日常身辺小説の安易に流されていない。ロシア語は無論のこと、欧米語、東欧語への果敢な挑戦は読み進めて小気味よく快い。

とりわけポーランド語への傾注は著しい。本篇二十八章の中の五分の一以上の章が「ポーランド!」に拘泥して費やされている。アメリカには五百万人以上(二〇二一年のある統計によれば八百八十一万人)のポーランド系の人口があって、彼らのもたらしたポーランド語の固有名詞の数々は確実にアメリカ英語の一部になっているのである(「アメリカの中のポーランド」から引用)ということなら、それは必然とも言えるのかもしれない。としても、沼野充義のポーランド愛、量り難いほどに深い。ワルシャワという名前の街がアメリカのインディアナ、イリノイ、ケンタッキー、ミズーリ、ニューヨーク、オハイオ、ヴァージニア各州にあることを知ったのも、沼野の著作によってだった。

さらに瞠目するのは「シカゴ!」だ。その中心部から北西に広がるミルウォーキー通りには巨大なポーランド人街があり、その人口、五十万とも七十五万とも言われ、その居住区域に足を踏み入れるとポーランド語ばかりが聞こえてくる——というトリビアも、私はこの本から得た。シカゴは首都ワルシャワに次ぐポーランド系人民人口とも知った。以降、マイケル・ジョーダンの活躍したシカゴ・ブルズ黄金期にも、映画『シカゴ』のアカデミー賞受賞時にも、私の脳裏に強く蘇ったのは、この「ワルシャワからシカゴへ」だった。淡々と描かれながら、強い衝迫を得た章だった。カフカ『アメリカ』のカール・ロスマン少年のストーリーそのまま、迫害を受けたポーランド人の求めた新天地が「シカゴ!」だったに相違ない。

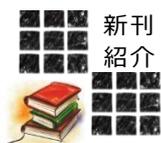
新版の「がんばれイディッシュ語」は、このたびさらに補論が付加されて、胸踊る興味深さだった。「イディッシュ」への沼野の熱が今再び本文以上の濃厚、濃密さで伝わってくる。ドイツ語方言として取り扱われがちだが、イディッシュはまさにユダヤ語であり、東欧ユダヤ人の母語であると断じている。潔い断定に胸が熱くなる。特筆すべき章と思う。

類い稀なポリグロット沼野充義の、彼にしか書き得ない言葉のヴァイオリン旋律に、是非耳傾けて欲しいと熱望する。けだし名エッセイである。

蛇足ながら、今、私は沼野充義・恭子夫妻の編訳、現代ロシア小説傑作選『ヌマヌマ』(河出書房新社 2021.10)にもはまって抜けだせずにいる。これも加えて推したい。怖るべしヌマ! ヌマ!

(文中敬称略)

(長屋のり子、詩人、会員)



新刊  
紹介

## 『いまは、ここがぼくたちの家：

ウクライナから戦争を逃れてきた子ども』

バルバラ・ガヴリルク(文) マチェイ・シマノヴィチ(絵)

田村和子(訳)

彩流社 2024.12



本書を読んで、私は自分の子ども時代を思い出しました。主人公のローマン君が、故郷のウクライナでの戦争の恐怖に加えて、避難先のポーランドで、レッテルを貼られて、どうせ言葉が分からないだろうとクラスメイトからいじられるのは、避難してきた子どもたちにとって絶望でしかないでしょう。気持ちが追い詰められてしまいます。

私は父の仕事の関係で全国を転々としました。具体的には、兵庫県、大阪府、愛知県、東京都、千葉県、そして北海道で暮らしています。また、社会人になってからは、マレーシアとシンガポールに14年間住みました。移動を繰り返したことで、その地域の文化や習慣を知り、考え方の違いに気付く

ことができたので、今は転校に感謝しています。しかし、苦労も多くて大変でした。

まず、レッテル張りに苦労しました。私は小学4年生のとき、1980年初頭に兵庫県の宝塚市から札幌市に転校してきたのですが、当時は漫オブームでした。そのため、転校した小学校のクラスでは

「関西人は漫才師のようなものだ」と思っている生徒が少なからずいました。だから「面白いことを言うヤツではないか?」と期待されたのですが、それが辛かったです。また、B&Bの島田洋七さんの「めっちゃめっちゃ陰気やでえ〜!」が爆発的に流行っていたため、私にもその口調と振りをするように強要する生徒がいました。今であれば「めっちゃめっちゃ陰気やでえ〜!」とご本人のように腰を振ってやれると思います。しかし、北海道に来たばかりで、友だちと別れた悲しみを引き摺っていた私は、この美味しいレッテルを上手く利用できませんでした。

次に、表現方法の違いに苦労しました。「捨てる」ことを関西では「ほかす」と言います。一方で、札幌では「投げる」と言うと思います。だから掃除の時間にクラスメイトからゴミ箱を渡されて「このゴミを投げて!」と言われたとき、私は驚きしばらく呆けていま

た。「何やってんの、早く投げてきてよ!」と促されたので、「ホンマに、ええの…?」と戸惑いながらゴミ箱を抱えて中のゴミを一気にぶちまけました。今度はクラスメイトたちが驚き呆けていました。漫才師のように面白くもなく、また指示が通らない私の立場が一層不利になったのは言うまでもありません。この出来事がきっかけとなって、私は「北海道の言葉が分からないとても困った人」として、何についてもやたら細かく説明されるようになりました。その状況を回復するため、私は関西弁を封印して「投げる」「こわい」「したっけ」などの北海道の特有な表現を過剰に使うことで道民化できていることをアピールするようにしました。

今後は日本も外国人を積極的に受け入れていくはずなので、私も共感力を鍛え、外国の子どもにも寄り添ってあげられるようになりたいものです。

(齊藤賢人、会員)



## 敦賀における人間性のレッスン

シルヴィア・オレーヤージュ & 佐藤レミリア



「人道の港」敦賀ミュージアムの静かな展示室で、3人のポーランド系日本人の子どもたちが黙って見入っています。彼らの目は色褪せたモノクロ写真に注がれています。その中には、まるで自分たちに似た、100年前のポーランド人の子どもたちが写っています。写真の子どもたちの表情には、苦しい体験の跡と、わずかな希望のきらめきが映し出されています。

それは「ポーランド・シベリアの孤児たち」——戦争と革命によるロシアの混乱の中で孤児となり、孤独と絶望に打ちひしがれていた子どもたちです。ウラジオストクでポーランド極東児童救済委員会を設立し中心となったアンナ・ピエルキェヴィチという勇敢なポーランド人女性は、ポーランドの孤児たちを決して忘れさせませんでした。彼女の必死の助けを求め、すべての子どもたちのための母の叫びは世界に響き渡りました。

そして、日本がそれに応えたのです! 日本赤十字社と敦賀の一般市民は、心と家を開きました。ただの避難所ではなく、人間性そのものを差し出したのです。子どもたちは温かいお風呂、清潔な服、栄養ある食事を受けました。日本の子どもたちは自然と、飢えたポーランドの仲間にもみずみずしく甘い赤いリンゴを持ち寄りました。しかし何よりも、見知らぬ異国の地で、異なる言語と完全に違う文化の中で、子どもたちは優しさと笑顔を受け取ったのです。体と心の傷を癒すほどの繊細な気遣いに包まれた孤児たちは、やがてポーランドへの長い帰路に就きました。

敦賀ミュージアムに立つポーランド系日本人の子どもたちは、深い教訓を受け取っています。それは「思いやりには国境も時代も政治も関係ない」ということ。「大きな苦しみの前では、一つの人間的な行動が数百人の運命を変え得る」ということ。ポーランドと日本の絆は、単なる政治や経済関係ではなく、深い共感の記憶に刻まれていることを、子どもたちは目の当たりにします。

ポーランド系日本人の子どもたちの目に浮かぶ涙は、当時の孤児への同情だけでなく、深い感謝の涙でもあります。どれほど暗い時代にも善意という光が灯せること、それは世代も大陸も越えて伝わる温もりになることを、子どもたちは学びます。敦賀の物語は、私たちが皆ひとつの人間家族であり、互いに無償で助け合うことこそが最も高貴な使命であり贈り物であると、時代を越えて思い起こさせてくれるのです。

(Sylwia Olejarz, 北海道医療大学 & Remiria Sato)

